



# 堀船中だより

心身ともに健康にして、国際的視野に立って社会に貢献し、自立した人を育成する。

教育目標

自ら学び 自ら考え 自ら行動できる生徒

令和6年10月 第7号

校長 阿久津 光生

〒114-0002

東京都北区王子5-2-8

Tel 03-3911-8817

## 《9月6日(金)2年生理科の実験のために金沢から先生と大学生8名が来てくださいました!》

9月6日(金)5・6校時に、本校の研究テーマであるアントレプレナーシップ教育の一貫で、石川県の金沢工業大学バイオ・化学部 応用バイオ学科の相良先生と8名の大学生のみなさんが、2年生の理科の実験授業のためにわざわざ金沢から新幹線に乗って来てくださいました。

消化酵素タカジアスターゼやアドレナリンの精製を発見した偉大なる化学者・高峰譲吉博士の意志を引き継いで日夜研究を続けている大学生が、さまざまな実験道具を大学の研究室から持ち込んで、消化酵素等について大変分かりやすく、丁寧に教えてくださいました。読売新聞社の取材もあり、Jcomでも紹介されました。

世界に誇るアントレプレナー・高峰譲吉博士を通して、金沢工業大学の学生さんが本校中学生に授業をしてくださる機会を与えてくださったNPO法人高峰譲吉博士研究会の長谷部様をはじめ、三門様、金沢工業大学バイオ・化学部応用バイオ学科准教授の相良先生に、改めて感謝申し上げます。



## 《9月15日(日)祭礼 栄町こども神輿のお手伝いボランティアありがとうございました!》

9月15日(日)の祭礼で、栄町こども神輿のお手伝いボランティアに13名もの生徒のみなさんが来てくれました。こども神輿や山車をひっぱり、小さいお子さんや地域の皆さまと交流ができて、貴重な体験となりました。生徒のみなさん、試験前にも関わらず地域ボランティアに参加してくれて、本当にありがとうございました。



## 《2年生 アントレプレナーシップ教育 東京証券取引所から講師の方が来てくださいました》

2年生は、9月24日(火)と26日(木)にアントレプレナーシップ教育を行いました。

講師として、東京証券取引所 金融リテラシーサポート部 教育グループの鈴木様をお招きし、「株式会社の仕組み・社会や経済の動きと株価」というテーマで、経済について教えていただきました。ボードゲーム型の教材を使い、様々な経済事象に基づく株価変動を通じて、経済の具体的な動きを学びました。生徒達にとってなじみが薄く、難しく感じやすい経済の内容でしたが、講師の鈴木様のおかげで楽しく勉強することができました。アントレプレナーシップ教育の一貫として、みなさんの将来のキャリアを考えるきっかけや、アイデアを実現する力を磨く授業になりました。



## 《北区連合体育大会 選手の皆さんが一生懸命頑張りました！》

9月20日（金）、足立区舎人公園陸上競技場において、第60回北区連合体育大会が行われました。

秋とは思えない猛暑日で、熱中症や体調不良が心配されましたが、堀中生のみなさんは自己ベストを目指して大いに健闘しました。以下、成績を紹介します。

### 【女子】

3年生	佐藤（有）さん	3年	100mYH	6位
3年生	寺嶋さん	3年	100mYH	8位
3年生	中嶋さん	3年	走高跳	8位
3年生	石川さん	3年	800m	6位
3年生	高橋（海）さん	3年	100m	7位
2年生	中嶋さん	1,2年	走高跳	7位
1年生	柳澤さん	1,2年	走高跳	4位

### 【男子】

3年生	安藤さん	共通	400m	7位
3年生	高野さん	3年	走幅跳	7位
3年生	青山さん	3年	走幅跳	6位
3年生	小川（悠）さん	共通	200m	5位
3年生	竹本さん	3年	110mJH	7位
3年生	師星さん	共通	砲丸投	3位
2年生	園田さん	1,2年	砲丸投	3位
1年生	平野さん	1,2年	走高跳	6位
1年生	宇南山さん	1年	1500m	4位



## 《祝 1年生 三浦さん 水泳 都大会で第1位！ 本当におめでとうございます》

1年生の三浦さんが、9月15日（日）に行われた第72回東京都中学校学年別水泳大会で、1年女子50m平泳ぎで見事第1位、さらに女子4×50mフリーリレーで第3位、女子4×50mメドレーリレーで第4位と、大変素晴らしい成績を残しました。本当におめでとうございます。これからもスーパーアスリートとして活躍することをみんなで応援しています。



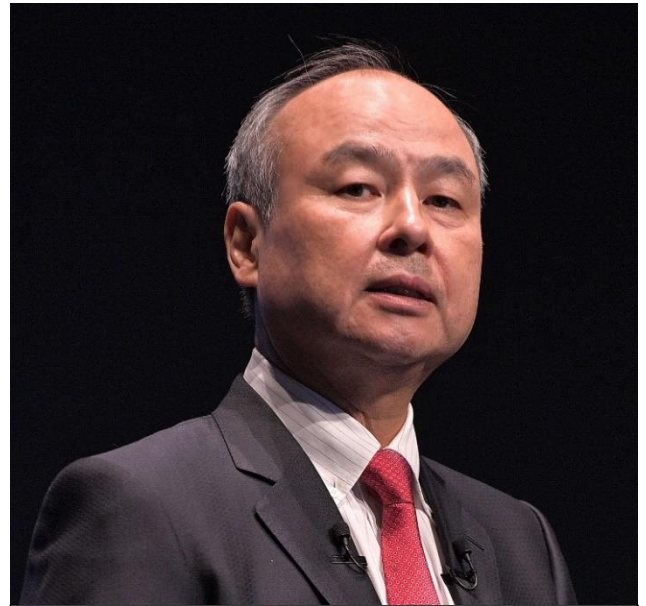
## アントレプレナーの生き方 (3) ～孫 正義氏 その1～

日本中のほとんどの人が知っているソフトバンクグループ株式会社代表取締役の孫正義氏は、世界でも最も注目されている経営者の1人です。

孫氏は、1957年に在日韓国人3世として佐賀県鳥栖市のJR鳥栖駅近くの無番地で生まれました。生家は国鉄の土地を不法占拠していたため、住所もない場所でした。家畜の豚とそのエサの臭いが漂うバラック小屋で育った孫氏は、高校入学後「実業家になる」と一念発起します。福岡県の高校に進学後、語学研修で渡米。そのときの体験に刺激を受け、高校を中退してアメリカに渡り、最終的にアメリカの大学の中でも屈指の名門として知られるカリフォルニア大学バークレー校の経済学部編入しました。

孫氏の「実業家として起業する」という決意は固く、夢の実現のため、日々の猛勉強はもちろん、さらに仕送りを断って「毎日発明」というノルマを自らに課していました。懸命に努力を重ねる中、孫氏に一つの画期的なアイデアが思い浮かびます。それは音声機能付き電子翻訳機でした。具体的には、今のパソコンのキーボードのような本体に例えば「こんにちは」と打つと、「Hello」という文字が小さな液晶画面に出るだけでなく、「ハロー」という音声まで聞こえるという発明品です。バークレー校宇宙科学研究所モザー博士たちの協力を得ることで、孫氏はこのアイデアを形にします。

試作品ができると、孫氏はさっそく日本の電機メーカーに手紙を送りました。10社ほどから返事が来たため、夏休



孫正義氏

【提供 ソフトバンクグループ株式会社】

みを利用して日本に一時帰国した孫氏は、意気揚々とメーカーを回り始めました。しかし希望に胸を膨らませた学生発明家が思っていたよりも、現実の壁は厚く、高いものでした。孫氏の意気込みもむなしく、大手9社から立て続けに断りを受けてしまうのです。最後に残った10社目は、孫氏が本命としていたシャープでした。孫氏は最後の望みをかけて、奈良県天理市のシャープ中央研究所を訪問します。そこで孫氏を待っていたのは、電機産業界では誰もが知っている超大大物の佐々木正氏でした。

佐々木氏といえば、電子立国日本を誕生させた立役者の一人であり、超小型電卓の開発で世界に名を轟かせたエンジニアです。現在誰もが当たり前に使っている電卓も、開発当初は自動車よりも高価なハイテク機器でした。しかし、佐々木氏が最先端の半導体と液晶の技術を取り入れたことで、エレクトロニクス業界全体を巻き



孫氏が発明した音声機能付き電子翻訳機

【提供 ソフトバンクグループ株式会社】

込んだ技術革新と猛烈なコストダウンの波が生み出され、20キロ以上もあった巨大な装置がポケットに納まる形状にまで進化したのです。

そんな佐々木氏に対して、孫氏は、自身の発明品について熱心に説明をして、商品化を訴えかけました。佐々木氏は孫氏の話を受けることなく、最後まで聞いてくれました。礼儀正しく、目を輝かせながら堂々とプレゼンをするこの青年に、佐々木氏は並々ならぬビジョンと人物としての魅力を感じたといいます。佐々木氏は、「英語が成功したら、国連で使用する8カ国語の翻訳にも挑戦しなさい」と孫氏に助言を与えると、最終的に1億円もの契約金を研究費として提供してくれたのです。これには孫氏の将来性を見込んだ評価もありましたが、カートリッジ交換だけで他言語に対応させるという孫氏のアイデア自体が、佐々木氏には、正にソフトウェアで勝負するこれからの時代の発想に思えたのです。孫氏のアイデアは段階を追ってシャープの商品へと昇華していき、電卓機で培われた技術は、最終的には、シャープの大ヒット商品となる電子手帳のザウルスへと進化していくのでした。

アメリカに戻った孫氏は、佐々木氏から得た契約金を手元に、学生ベンチャーをはじめます。日本で大ブームを起こしていたインベーダーゲーム機をアメリカに輸入することを思いつき、これが当たって大金を手にすることができました。

この成功に満足することなく、大学を卒業した孫氏は資金を携えて日本に帰国します。1981年、福岡県福岡市の小さな町で創業。孫氏の下で働く社員はたった2人のアルバイトでした。孫氏は事業開始日にみかん箱の上に立つと、初めて雇った2人に向かって「いつか売上高を1兆(丁)、2兆(丁)と豆腐屋のように数えられる会社にしてみせる」と壮大な夢を語り、強い決意を示しました。しかし2人は途方もない話に呆れ果てたのか、繰り返し聞かされて嫌になったのか、それから一週間も経たない間に辞めてしまったといいます。孫氏は1,000万円あった資本金のうち800万円を家電・エレクトロニクスの展示会への出展、残りの200万円を使ってカタログ代わりの雑誌を作ります。創業早々、一瞬の怯みもなく大勝負に出たことで、資本金はゼロになりました。ここまでが、孫氏の事業家人生の始まりです。



創業直後に出展した展示会の様子  
【提供 ソフトバンクグループ株式会社】

しかし、それからわずか一年にして、孫氏は自らパソコン専門誌を創刊すると、ソフトウェア流通の貴重なルートである雑誌広告と自社とを自力でつなぐことに成功しました。ソフトウェア流通と出版という両輪により、創業から実質1年目にあたる1982年には売上高が20億円、翌1983年には45億円になっていました。

勢いに乗る孫氏でしたが、好事魔多し、会社もいよいよこれからという時に、健康診断で慢性肝炎と診断され、即入院を余儀なくされます。そしてなんと、余命5年の宣告を受けてしまったのです。孫氏は最初入院した時、ボロボロと泣き崩れたそうです。会社はまだ始めたばかり、私生活でも子どもが生まれて正にこれからというのに、長期の入院をしなければならなくなりました。自分にはあふれるばかりの情熱とエネルギーがある。事業もこのまま続けていけば、いずれそれなりの大きな成功ができるという手応えもある。しかし医師からあと5年ほどの命だと宣告され、とんでもなく落ち込んだといいます。

そんな孫氏の気持ちを変えたのは、司馬遼太郎の『竜馬がゆく』だったそうです。高校を中退してアメリカに行く前にこの本を読み、渡米中も何度も読み直し、帰国して事業を立ち上げ、「情報革命」に自らの生涯を捧げると決めた時にも手に取ったこの本を病室で読み返してみると、あることに気が付きます。「竜馬だって33歳で死んだ。だけど最後の5年ぐらいの時間で、彼はその生涯で最も大きな仕事をしたではないか」と。だから余命5年というのは確かに短いけれど、もしかしたら、その5年間で自分もそれなりのことがやれるかもしれない。あるいは、その5年間の間に、肝炎を治す方法も見つかるかもしれない。孫氏はそう考えることができるようになったといいます。それからの孫氏は「一生の間でこんなにたっぷり時間がもらえるのは最初で最後だろう」と考えを前向きに改め、全部で3,000冊以上にも及ぶ本を読んだのです。孫氏は結局3年半という長期入院を余儀なくされましたが、当時最先端医療だった「ステロイド離脱療法」により、奇跡的に一命をとりとめたのです。

このように孫氏は、船出早々にして命に関わる大病を患ったにも関わらず、足を止めることなく挑戦を続けました。1986年、28歳の時には社長職に復帰。以降、事業を拡大し、今や時価総額10兆円超のグローバル企業のトップとして、孫氏はさらに躍進を続けているのです。